



『SDGs 関連：バイオマス処理設備』

長州産業株式会社 バイオマス事業部 バイオマスシステム課 揖斐恒治

近年、深刻な地球温暖化に対応する為、様々な取り組みが行われています。長州産業では太陽光発電を中心とした事業展開をする中で、水素事業やバイオマス事業など、新たな再生可能エネルギーに向け、様々な設備の販売、開発を進めています。バイオマス処理設備は社内、半導体製造装置で培われた真空技術を元に協業企業様と牧場などに設備を納入し、運用の手助けをさせて頂いています。

実際の処理について家畜糞尿を例にとると、「通常堆肥舎」と呼ばれる広大な敷地で3~4ヶ月必要な堆肥発酵を、当該設備では1日で初期処理を終えることができます。大幅に工程を削減できることから、CO2も削減が可能になります。

現在運用中の案件としては、食品工場の食品残渣や

残飯などを含めた多岐にわたる材料を検討中で、その他さまざま材料についても開発を進めています。さて、現在の廃棄物の状況ですが、海外の現状を見ても農地の増加、廃棄物増加は進んでおり、それに相反するように未だ貧困と向き合っている国もたくさんあります。国内でも堆肥の再利用には限界が来ており、結局焼却処理がされていて、次の策が求められています。SDGsと名はあるものの、なかなか進んでいないのではないかとというのが正直なところなのではないでしょうか。

長州産業の当事業は未だ資源を堆肥化するという段階です。堆肥の販売、再利用を協業企業様とできる範囲で進めております。一方で堆肥はカーボン量が非常に多く、水素を大量に保有していることは言うまでもありません。出来上がった堆肥からの水素抽出、燃焼による発電など、再度エネルギーに変換することを目指して取り組みを進めていきたいと考えております。以上



水分濃度測定の様子



設備全体の様子

環境図書室の有効利用について

年度が替わりすでに2ヶ月がたちました。今年度のまちなか環境学習館”銀天エコプラザ”運営の重点課題として、環境学習室の有効利用があります。開館時間（平日8:30~17:00）に約千冊の環境関連図書や、環境倫理に重点を置いた”まちかどブックコーナー”としてご利用いただけます。環境には社会環境問題も含まれます。

これからの社会を担う若者たちにとって、いかに生きていくか、本当に重要な時期になっており、ぜひ環境学習室を、話し合いの場、学びの場としての活用したいと思います。具体的には昨年残念ながら呼びかけが十分でなく成立しなかった「銀天かたりば」をリベンジして、志を持って飛躍したい人、意識はあるが学校に行く気がしない人など、いろんな層の若い人たち同士が遠慮なく語り合える場になるように、努力したいと思います。興味のある人、家族の中に興味を示しそうな人がおられましたら、遠慮なくご連絡ください。0836-39-8110 あるいは ubekuru@gmail.com まで

皆様の活力がみなぎりますように ー 水分補給を忘れずに！



宇部市まちなか環境学習館 銀天エコプラザ

〒755-0045 山口県宇部市中央町二丁目11番21号

交通手段 JR宇部線：「宇部新川駅」徒歩7分

宇部市営バス：「宇部中央バス停」徒歩3分

駐車場 無し（近隣の有料駐車場等をご利用ください）

TEL/FAX 0836-39-8110 E-mail ubekuru@gmail.com

開館時間 9時~17時 HPアドレス <http://ubekuru.com/>

休館日 土・日、年末年始（12月29日~1月3日）



HomePage



facebook



X



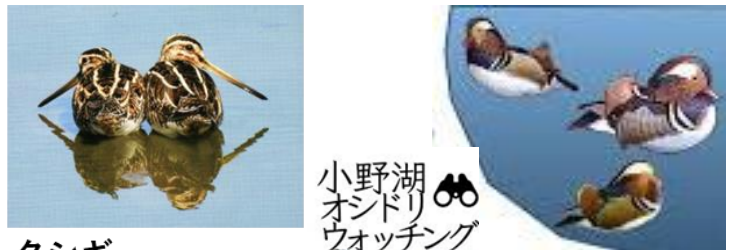
NPO法人うべ環境コミュニティー

宇部野鳥保護の会は昭和52年（1977年）5月、ときわ湖畔にあった国民宿舎「常盤荘」で設立総会が行われ、野鳥の保護を通じて郷土の自然環境保全に努めることを目的に発足した。あれから約半世紀、3年後の令和9年（2027年）には50周年を迎える。幸運にも発足時から会員として所属し、大先輩の方々の保護活動を間接的に見ながら、また、微力ながら参加もしてきたので、約半世紀にわたる会の活動を振り返りながら、会が係わった環境保護活動と環境問題を考えてみたい。

発足当時は松くい虫による松枯れが拡大し始めており、松くい虫防除のためヘリコプターによる農薬の空中散布が行われていた。繁殖期の鳥たちが農薬の降りかかった餌をヒナに与えることから中止を求め散布前後の鳥類調査を片倉や霜降山で実施した。1980年には阿知須干拓地バードサンクチュアリー設置について、野鳥の会山口県支部と連名で阿知須町長に要望書を提出、埋め立て反対運動が続いた。1985年、国定公園秋吉台巨大観音像建設反対運動。1991年常盤湖レガッタに対する申し入れ、及びレガッタ開催影響調査。1992年、小野藤河内ゴルフ場反対意見書を宇部市長に提出、反対署名運動開始。後に市長リコール署名へ発展。2000年、宇部市小野湖のオシドリ保護に関する要望

を山口県知事に提出、小野鳥獣保護区が設定される。2006年、シグマパワー山口発電所建設における西沖の山のチュウヒに対する環境保全対策についての要望書を環境大臣に提出。常盤湖での国体に向けたレガッタの練習について要望書を山口県知事に提出。2009年小野湖注ぐ太田川上流に建設される産業廃棄物処理場に対し宇部市の環境4団体が小野湖の水を守る会を立ち上げ、建設反対宣言を行うなど、多くの先輩や仲間が精力的に保護活動に参加され個々の開発は食い止められてきたが、周りを見ると身近な自然はどんどん減り続けている。

近年、生物多様性という言葉が頻りに耳にする。国は生物多様性国家戦略を閣議決定、県は生物多様性センター開設、貴重な生物が生息する場所は守られるかもしれないが、身近な場所にも多くの生物が生きていることに気づき、生きものの繋がりに目を向け、小さなことでもよいので行動する人が増えなければ自然は守れないと思う。私たちと一緒に自然を楽しみ守りませんか。



タシギ
アボセット通信 No.104

続く挑戦

オリーブ栽培のその後

小野湖の水を守る会 津島 榮

2016年から始めた休耕田へのオリーブ栽培、今年は2024年、既に10年近くが経過した。しかし計画「期待」した成果は得られていない。木は育つが実がならないのです。受粉樹の混植、休耕田から水はけの良い畑への圃場変更など工夫を重ねましたが、期待通りの成果が得られていない。指導者である九州オリーブ協会からもこの問題について明確な指導は得られていません。友人知人からも何時まで結実しないオリーブ栽培を続けるのかとの声を聞くようになった。

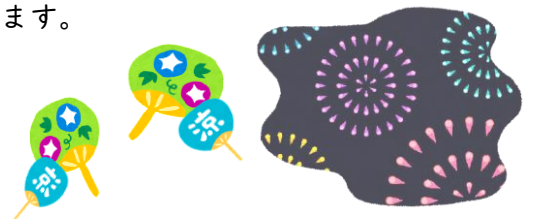
現役時代40年間同じテーマに挑戦し、同様な状況に追い込まれた経験があります。上司からこのテーマは無理だ研究をやめなさいと指示を受け、これで最後と実施した実験が成功し、現在ではゆるぎない大きな事業に成長させた経験を持つ私、《すぐやる、できるまでやる》をモットーとしています。（これは、一代で2兆円企業を創業した日本電産、現ニデック創業者の言葉でもある）。

ここでオリーブ栽培をやめるという選択枝は私には無い。私は原因が路地栽培ではコントロールできない気象条件に原因があるのではないかと思うようになった。そこでいろいろ調査すると一定の成果を挙げているのはいずれも海岸線に近い圃場であることがわかった。

そこで圃場を宇部市の北部小野から海岸線近くに移植することを決断した。現在すでに小野地区に650本植えつけています。今年移植も含め約100本をかめうら地域の海岸線近くで移植することとしました。

協力者にこのことを話し、一部の人を除き、多くの皆さんから賛同を得た。既に植え付けを完了し、期待して見守っている状況にあります。

<出来るまでやる>
成功するかわくわくして
見守っています。



第70回宇部市花火大会は7月27日（土）予定